

花ちゃん、オー君、モンタ博士、フツ博士のかくかくドドド立ててくら

国立市立国立第七小学校

平成29年4月21日 NO.8 (408)



オー君 「あれあれ？三角の何かがあるね。なんだろう。」

花ちゃん 「よく見ると、種みたいですね。」

モンタ博士 「これは、植物の種だよ。左がコスモスで右はヒマワリだね。」

花ちゃん 「どうしてあるのですか。」

モンタ博士 「この種は、去年、国立七小で咲いたコスモスとヒマワリの種なんだ。」

みんなにあげるつもりで、三角の紙に種を入れたということさ。給食の
後にみんなで袋に入れたんだ。」

オー君 「わーい！わーい！それでは、国立七小の子供たちは、花の種をもらえるとい
うことですか。」

モンタ博士 「もちろんだよ。たくさんたくさん作ったからね。みんなにあげるよ。来週の
24日(月)のお昼休みに校長室前で配るから、ほしい人はぜひ集まってく
ださい。コスモスもヒマワリもどちらも一人一つずつはあげられるよ。」

花ちゃん 「うれしいですね。たくさん作ったといいますが、どのくらいあるのですか。」

モンタ博士 「コスモスは約500袋、ヒマワリは約800袋くらいあると思うよ。」

オー君 「へえー。そんなにたくさんあるんですか。国立七小の^{くにたちななしょう}子供は^{こども}357人^{にん}なので、あまってしまうですね。」

モンタ博士 「そしたら、JR南武線の^{なんぶせん}谷保駅^{やほえき}に置いておいて、ほしい人が^{じゆう}自由^{じゆう}にもらえるように^{おも}しようかと思うんだ。」

花ちゃん 「すばらしいアイデアですね。ほしい人が^{ひと}おうちに^も持って^{かえ}帰って^{たね}種をまけば、お花^{はな}が^さ咲いてうれしいでしょうね。」

オー君 「あっちこっちで^{はな}花が^さ咲いて、^{まち}街ぜんたいが^{はな}花いっぱいになるね。」

モンタ博士 「みんなもおうちに^も持ち^{かえ}帰って^{にわ}まいて^うごらん。お庭^{はち}に^{はな}植えて^さもいいし、鉢^{はち}でもいいね。きっと楽しいよ。大きくなって^{たの}花を^{おお}咲かせるのが^{はな}楽しみだよ。」

花ちゃん 「種^{たね}から^め芽^でが出て、^{おお}どんどん^{ようす}大きくなって^{かんさつ}いく^{ようす}様子が^{かんさつ}観察^{ようす}できていいですね。」

オー君 「自分で^{じぶん}育て^{そだ}るといのが、^{みず}おもしろい^{みず}ですね。水^{みず}を^{わす}あげるのを^{わす}忘れないように^なします。ほかに^{なに}何か^き気^きをつけることはありますか。」

モンタ博士 「お日^ひ様^{さま}によく^あ当たるように^{とく}した^{ひりょう}ほうが^{ひつよう}いいね。特に^{はな}肥料^さなどは^{はな}必要^さないの^{はな}がいいね。だれでも^{はな}みんな、^さきっと^{はな}たくさん^さの花^さを^{はな}咲^さかせられるよ。」

花ちゃん 「花^{はな}いっぱいになったら、うれしいですね。」

モンタ博士 「そうだね、^{ちい}小さな^{たね}種^{おお}から^{はな}大きな^さ花^{はな}を^{はな}咲^さかせたり、^{はな}たくさん^{はな}の花^{はな}を^{はな}つけたり、^{かんが}どうしてかな？^{かんが}どこに^{かんが}そんな^{かんが}力^{かんが}があるのかな、不思議^{かんが}だなと^{かんが}考^{かんが}えるのもいいね。ともかく、^{はな}花^{そだ}を^{はな}育てると^{はな}いうことは、^{はな}すばらしい^{はな}ことだね。」

花ちゃん 「花^{はな}があると、^{こころ}心^{やす}が^き安^{やす}らぎますね。気^き持^もちが^{やす}優^{やす}しくなりますね。」

オー君 「^{みどり}緑^はの^み葉^めっぱ^{やす}を見て^{からだ}いると、目^みも^{やす}休^{やす}まって、^{からだ}体^{からだ}にもいいですね。」

モンタ博士 「そうだね。いいことばかりだ。さあ、みんな^{たね}で^{たね}種^{たね}を^{たね}もらい^{たね}においで。」

花の効用

誕生日には花、お祝い事には花、愛の告白や病気のお見舞いにも花、お別れにも花、人生の最後にも花、人が亡くなっても花を供え故人を偲ぶなど、人間生活と花との関係性はとても深い。窓辺に一輪の花があるだけで、明るく癒しの空間になるから不思議である。花というものは、ものすごい大きな力があるように思う。

昔から人は花をととても大切にしてきたように思う。人は大昔から花の効用に気付いており、自然発生的に花を利用してきたのであろう。そして、それはいつの時代からも変わらない普遍的なものであるようにも感じる。このように考えると、花を愛するという思いや感情は、人間が人間としてあるべき本源的な大切な必須の条件でもあるようにも思うが、これは少し言い過ぎだろうか。花いっぱいの世界がたくさんになればなるほど、より人間的な感情の高まりや、やさしさや思いやり、感謝や尊敬の心情などにあふれた世界になると考える次第である。また、どこの国でも花を大切に扱ってきていると思う。それぞれの国々で咲く花をモチーフにし、芸術が生まれ尊ばれてきたと考える。世界中の人々に花は愛されている。万物躍動の春、花はその存在感を主張する。花には不思議な力があるものだ。